「きみは、フランス語の医学の本を読んでいるね。どこでフランス語を勉強したのかね。」

「はい、ぼくは、教会の牧師さんと中学の先生に、教わりました。」

この程度の勉強で、フランス語の医学の本を読みこなす清作の語学の力とその努力に、血脇先生は、おどろくばかりです。

ある日、血脇先生を案内して、若松の町を歩いていたとき、

「きみの勉強は、すばらしい、もし、東京にくることがあったら、たずねてきなさい。」

との一言が、清作の心を動かしました。「血脇先生が、ぼくを認めてくれた。ぼくは、医者になることができるのだ。」と、ますます勉強にはげみました。

やがて、清作は、二十歳になり、東京へ出て、医者になる試験を受けることにしました。